

伝え合いを通して、学びを深める子の育成

小千谷市立小千谷小学校

1 研究テーマ

「伝え合いを通して、学びを深める子の育成」

2 テーマ設定の理由

昨年度の研修では、話し合う必要感を生み出す課題設定の有効性やねらいに迫る板書は子どもたちの考える意欲を高め整理する役割を果たすことのほか、深まった考えや学習内容のまとめ方等でも成果がみられた。「伝え合い」の活動が子どもの思考力、表現力を高めることも、授業実践から検証することができた。また、そのためのスキルも定着し、子どもたちは使えるようになってきた。

しかし、自分の考えと仲間の考えのずれや重なりに気付き、さらに自分の中で練り上げていくことで、よりよい理解や認識をもつ姿までには至っていない。それは、「伝え合い」が「考えの発表会」になっていて、互いの考えを交流させる活動になっていないことも原因である。考えを深めることに焦点をあてた手立てをとる必要がある。

そこで、研修テーマは昨年度と同じにし、「考えが深まるとはどのような状態か」「そのためにどのような手立てをとればよいか」について研修を深めていく。

3 学習指導改善調査事業との関連から

学習指導改善調査の結果から、以下のような力を育てていく必要性が明らかになった。

- ・資料から必要な情報を見つけ、それをもとに自分の考えを記述すること。
- ・順序立てて、自分の考えを説明すること。
- ・算数では、どうやって求めるか、なぜそのような式になるかを導き出すこと。

4 目指す子どもの力

伝え合いを通して他者の考えを聴き、自分の考えを再構成し、分かりやすく表現できる力

5 研究内容と方法

「伝え合い」の活動を取り入れた授業実践を通して学びを深める子どもの姿を実現するために、教師の支援のあり方を考え授業を実践する。

(1) ペアや小グループによる伝え合いをし、考えを深める授業展開を行う。

子どものつまずき、つぶやき、間違いを大切にする。また、分からない時に「どうすればいい」と尋ねたり、「こうすればいいよ」と応えたりする子どもを育て、聴き合う学級風土を醸成する。

伝え合いの活性化を図り、子どもたちの積極的な学びを実現するために、「焦点化」「視覚化」「操作化」を念頭において授業を構想する。

(2) 研究授業では、考えを深めるための手立てを提案し、明記する。

例えば①複数の資料、文章を比較して考える。

②資料、文章を分類して考える。

- ③ 序列化して考える。
- ④ 関連付けして考える。
- ⑤ 基本の問題を生かして発展的な問題を解く など。

(3) 学習指導改善調査から見た思考力・判断力・表現力を高める文章表現のポイントを意識した重点単元を学年で決め、年に5回以上実施する。

文章表現のポイント

- ① 理由・根拠を付けて、思いや考えを書く。
- ② 接続詞を使って順序よく書く。
- ③ 仮定を使って、思いや考えを書く。
- ④ 自分の体験や知識、または予想を加えて書く。
- ⑤ 段落を使って書く。
- ⑥ 相手の立場に立った場合の問題点を書く。
- ⑦ 相手の考えに共感しつつも、反論を書く。
- ⑧ 根拠、理由に数値や資料を使って書く。
- ⑨ 文や資料を根拠として解釈や考えを書く。

6 学習指導を支える学力向上の取組

(1) 授業改善

- ・ 分かる授業づくりのためのポイント (①板書②発問③話し方・聞き方④ノート指導) を意識して、日々の授業を行う。月に一回チェックシートを使い、自分の授業を振り返る。ペア対話など話し合い活動を工夫する。

(2) 学習したことを定着させるため月例テスト・Web 診断問題を活かす。

- ・ 国語、算数の学年月例テストを学習内容の定着を図る機会として月一回実施する。授業で定着しなかったところ、次の単元のために復習した方がよいところなど各学年で分析をし、内容を考える。
- ・ Web 診断問題の活用として、次のサイクルで実施する。

・ 診断問題の実施 (できるだけ早い時期に) → 傾向の把握と全体、個別指導の実施 → サポート問題の実施 → サポート問題ができない子への個別指導 → 月例テストで確実に身につけているか確認 → 再テストなどで個別指導

(3) 学習規律の確立のため「共学の基礎基本」を活かす

- ・ 全校が、同じ指導内容で徹底する。家庭学習についても、「自学のすすめ」を使い指導する。また、初めの学年懇談会で保護者に説明する。
- ・ 振り返りカードなどを使って個人で振り返りをさせ、意識を高める。
- ・ 低学年では掲示用学習のきまりなどを使って、帰りの会で振り返りをさせる。(手を挙げさせるなど)

7 実践の概要

全32学級で、「伝え合いを通して他者の考えを聴き、自分の考えを再構成し、分かりやすく表現できる力」の育成を目指した授業研究を行った。以下は全体研修での実践の概要である。

学年	教科	単元名	手立て	成果
1	国語	想像を広げて物語を読む『くじらぐも』	<ul style="list-style-type: none"> 動きを取り入れたグループの伝え合いを経て全体に向けて音読発表の場の設定 	<ul style="list-style-type: none"> グループ全体で動作化を取り入れたり、くじらぐもになりきって読んだりする子もいた。それまでのグループでの伝え合いで子どもたちが読みを深め、ファンタジーの世界に浸り、自分たちなりの読みの世界を作り上げていく姿が見られた。
2	生活	ゴムゴムのおもちゃをつくろう	<ul style="list-style-type: none"> 気付きの質を高める学習環境や伝え合う場面の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 新たな願いをもち互いに高め合う姿が見られた。また、伝え合いを通して、自分の気付きを確かなものにしたり、仲間の気付きを受けて新たな気付きを獲得したりすることができた。
3	国語	組立てを考えて書こう～ハッピーな学級文庫を作ろう～	<ul style="list-style-type: none"> 「起承転結」を意識させるための自作の模範作品の提示とプリントの工夫 “色シール”を活用した話し合い活動の組織 	<ul style="list-style-type: none"> 起承転結の構造を意識させるプリントや自作の模範物語の提示は、見通しをもって活動を進めるのに有効であった。苦手な児童でも、真似ることから物語を作成することができた。
4	国語	感じたことや考えたことを話し合おう～「ごんきづね」を読む～	<ul style="list-style-type: none"> 考えを話し合い前後で比較できるワークシートの工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人が叙述をもとに自分の考えをまとめることができた。また、仲間の考えにつなげて発言する姿が見られた。
5	国語	立場を決めて、討論しよう	<ul style="list-style-type: none"> 発言や質問・振り返りのポイントや文型を提示 ディベート形式の話し合いの積み重ねによる習熟 	<ul style="list-style-type: none"> 意見→理由の順番で発表することやナンバリングの技術を使って話すことが身に付いている様子が見られた。さらに、相手の意見を受けて、述べることができた。
6	算数	2つの量の関係を調べよう～比例～	<ul style="list-style-type: none"> 身近で親しみやすい課題の設定 根拠をもとに論理的に説明できるためのノート指導の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> 単元構成を工夫したことで、子どもたちは「前時の内容を活用すれば問題解決ができる」という意識になり、既習事項を活用して問題解決に取り組んでいた。

8 本年度の成果と次年度への課題

(1) 校内研修について

成果

- ・全体研修公開授業の協議会では「一人一発言」をめあてに小グループの話し合いを中心に進めた。その成果として、自分のクラスの日々の授業につなげようという意識が強くなった。
- ・学年部研究授業や日々の授業で、全体研修公開授業とつなげた取組が行われた。
- ・文章表現のポイントを明確にして指導を積み重ねることにより、一人一人に考えたことを表現する力が身に付いた。
- ・各学年の授業研究では、仲間との伝え合い後、自分の意見と比べ、必要な情報を取り入れて考えを再構築する姿（考えが深まった状態）が見られた。

課題

- ・「相手意識」「目的意識」をもたせ、話し合いのよさを実感させるための授業を積み重ね、考えの深まりを自覚させる。
- ・課題設定の工夫と自分の考えを目に見える形（書くこと）で表出する学習を位置づける。

(2) 日々の授業について

成果

- ・月1回授業改善チェックシートで確認することにより、「分かる授業づくり」のためのポイントを意識して日々の授業を行う職員が増えた。
- ・4月に実施したチェックシートの数値が、全ての項目で向上している。

課題

- ・「視点を与えての振り返り」「板書にまとめを書く」が他の項目に比べ向上しない。授業の終末に書く時間が不足している。書くことに抵抗がある児童がいるためできないことが原因だと考える。
- ・家庭学習や朝学習で書く習慣づけを図る。重点教科を決めて振り返りの時間を確保し、積み重ねを図る。

(3) Web 配信集計システムについて

成果

- ・算数で県の期待される平均正答率を上回るクラスが増えている。
- ・配信問題の分析から、児童に定着していないところが分かり、学習プリントなどで補充学習を行うなど、結果をもとに指導する姿が見られた。また、どのように取り組んだらいいか学年や学年部で情報交換するようになった。
- ・クラスごとに県の期待される正答率と比較した表と誤答が多かった設問の分析により、クラスの実態を把握してシステムの活用促進を働きかけることができた。

課題

- ・確認問題の正答率を上げるために、提案したサイクルを確実に実施し、さらに誤答の解説を十分行って、全ての児童が分かった状態を目指して取組を推進していく。
- ・学年で取り組んでいるかを研究主任がチェックする。また、効果のあった各学年の取組を発信し共有していく。